

# 余は如何にしてカヴァアオロジストとなりしか

丹羽 典生  
民博 研究戦略センター

専攻は社会人類学、オセアニア地域研究。オセアニアにおける紛争や、フィジーの先住民を対象とする社会運動、開発と伝統文化の問題について研究している。

オセアニアにおける嗜好品といえ  
ば、カヴァアとベテルナッツがひろく  
知られている。前者は、コショウ科  
の木の根を粉にして水にとかし、醗  
酵効果を楽しむ飲みもので、パプア  
ニューギニアの一部から始まりヴァ  
ヌアツ、フィジーへとメラネシアを  
東へ横切り、ポリネシアでも愛飲さ  
れている。後者はヤシ科のピンロウ  
の実であり、これをコショウ科のキ  
ンナの葉で包んでかみ、独特の清涼  
感を楽しむもので、ソロモン諸島  
パプアニューギニアというメラネシ  
アでも西部を中心に嗜まれている。

飲用しない文化圏のなかにも、カ  
ヴァに憑かれた人びとが多く存在す  
るといふ事実であった。

じて、つながっているのだ。

## ●カヴァアオロジストの作法

彼らの多くは大学教育の機会を求  
めてフィジーで生活するうちに、カ  
ヴァの飲用を身につけたのである。  
そしてフィジーを離れ、さらなる教  
育を求めたり、研究職としてのキャ  
リアをハワイで始めるようになって  
も、その慣行を手放さず、むしろ大  
切にしている。まさに、文化のグ  
ローバル化を体現する存在でもある。

誰が言い出したのか、われわれはカ  
ヴァについて毎晩のように考えてい  
るカヴァアオロジストというわけであ  
る。ちなみに飲用に際しての作法は、  
それぞれがカヴァの味を覚えた文化  
圏の作法にのっとり、フィジー型か  
らヴァヌアツ型まで混在している。

どちらの味は独特の苦みを伴うと  
いう点で共通するものの、使用に際  
しての作法はまさに千差万別である。  
カヴァアに関するいえば、フィジーで  
は単独で飲むことは呪術の行為と関  
連づけられるため、避けられている。  
一方で、ヴァヌアツではカヴァアを飲  
む行為は人目にさらされるべきでは  
ないと、人の目にふれないように飲  
むことが作法とされている。

ローバル化を体現する存在でもある。  
たとえば、私がホノルル空港でハ  
ワイからフィジーに飛ぶ便を待つて  
いたとき、同じ便に搭乗するという  
ソロモン諸島民とカヴァアの酌をかわ  
したことがあった。また、あるバラ  
オ人は、残りの生涯においてカヴァ  
を手放すことはできないと、  
出身村の近くにカヴァアの農  
園を造る計画を語っていた。

私がハワイから帰国する際に開か  
れたカヴァアの席においては、非カヴァ  
ア文化圏出身であるわれわれが、どの  
ようにしてカヴァアの慣行を身につけ  
るようになったのか、  
当初その独特な味覚を  
どう認識したか、現在  
どう用いているのか、  
などといった視線から  
論集を創ろうと語り  
合ったのであった。

## ●地域・文化を超えはじめたカヴァア

二〇〇六年から二〇〇七年にかけ  
て半年ほど私がハワイに滞在してい  
るときにとりわけ印象に残ったこと  
は、太平洋諸島のうち本来カヴァアを

ソロモンもパラオも、い  
わゆる伝統的な意味では本  
来ベテルナッツの文化圏で  
ある。ハワイで知り合った  
われわれは、カヴァアという  
それぞれの文化には存在し  
ていない飲み物を慣習化  
(常習化?) することを通



ハワイ大学での送別会

もつとも、酒の席で  
の話をどこまで真に受  
けていいのか心許ない  
のではあるが。

